

結果構文に関する英語と日本語の対照研究

浅井良策

A Contrastive Analysis of Resultative Constructions in English and Japanese

Ryosaku ASAI

Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1, Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan

(Received November 3, 2015; Accepted December 4, 2015)

Abstract This paper discusses the difference between English resultative constructions (ERCs) and Japanese resultative constructions (JRCs).

- (1) a. The lecturer talked himself hoarse.
 b. *Koshi-wa jibun-no koe-o karakara-ni shabet-ta.
 lecturer-TOP himself-GEN voice-ACC hoarse talk-PAST.
- (2) a. John-ga kabe-o utukushi-ku nut-ta
 John-NOM wall-ACC beautiful paint-PAST
 b. *John painted the wall beautiful. (Kusayama and Ichinohe 2005: 182)

In recent years, it has been claimed, in the light of data like contrasts in (1) and (2), that ERCs can be extended based on the concept of ‘Causality’, while JRCs can be extended based on the concept of ‘Purpose’ (Kusayama and Ichinohe 2005; Murao 2009).

- (3) a. The wise dog barked his master awake to warn him of the fire.
 b. *A stray dog in the distance barked the sleeping child awake. (Kageyama 2007: 39)
- (4) a. Dareka-ga ukkari kaisha-no toile-o kitana-ku tsukat-ta.
 someone-NOM accidentally office-GEN bathroom-ACC dirty use-PAST
 b. Musuko-ga ukkari yakizakana-o kitana-ku tabe-ta.
 Son-NOM accidentally grilled fish-ACC untidy eat-PAST

However, it has been pointed out that some ERCs require their resultative phrase to denote an intended result as in (3). On the other hand, some JRCs allow their resultative phrase to denote an accidental result as in (4). In order to accommodate these data, we have suggested that the extension of ERCs and JRCs should be characterized in terms of ‘Causality’ and ‘Subjective evaluation’, respectively. Furthermore, we have incorporated the distinction by Talmy (2000) between satellite-framed languages and verb-framed ones to account for the fact that (i) compared with JRCs, ERCs are much more likely to allow for action verbs which do not imply a state change, as shown in (1) and that (ii) ERCs can be extended based on the concept of ‘Purpose’. On the other hand, the formation of JRCs like those in (2a) and (4) has been accounted for by drawing on Croft et. al’s (2010) observation, according to which even in verb-framed languages, the situation types which exhibit a higher degree of semantic integration between the causing event and the result event can be expressed by means of satellite-framing.

- (5) a. Otouto-wa katta bakari no sinsha-o syumiwaru-ku kaizousi-ta.
 brother-TOP brand new car-ACC tasteless customize-PAST
 b. Okasan-ga gohan-o mazu-ku tai-ta.
 Mother-NOM rice-ACC bad taste cook-PAST

Finally, we have discussed further extended instances of JRCs like (5). It has been suggested that they are sanctioned by a higher-order schema which captures the commonality between these instances and instances like (4).

0. はじめに

結果構文は動作の結果として得られたある実体の状態を単一の節で表現する文であると特徴づけることができ、以下に例示されているように英語と日本語の両者に見られる。結果状態は英語では形容詞句あるいは前置詞句で表される一方で、日本語では形容詞やいわゆる形容動詞の連用形である「形容詞－ク形」か「形容動詞－ニ形」で表される。

- (1) a. John painted the wall red.
b. They broke the window to pieces.
- (2) a. ジョンが壁を赤く塗った。
b. 彼らは窓を粉々に割った。

これまでの先行研究では、両言語の結果構文の成立に関して日本語の方が英語よりも制約が強いと主張されてきた（影山 1996, Washio 1997）。実際のところ、状態変化動詞が生起する上記の例とは異なり、変化結果を含意しない動詞が生起する結果構文は、(3) と (4) の対比に示されるように、英語では容認されるが、日本語では容認不可として判断される。このことから日本語では結果句が動詞の意味に内在的に含まれていない結果状態を表す結果構文は成立しないと見なされてきた（cf. 高見・久野 2002）。

- (3) a. John pounded the metal flat.
b. The lecturer talked himself hoarse.
- (4) a. ?ジョンが金属をペチャンコに叩いた。
b. *講師は自分の声をカラカラにしゃべった。

しかしながら、近年の研究において、動詞の意味に必ずしも含意されないような結果状態を表す結果構文が日本語においても成立する場合があることが指摘されている（草山・一戸 2005, Murao 2009）。

- (5) a. ジョンが壁を美しく塗った。
b. お母さんがご飯をおいしく炊いた。
- (6) a. *John painted the wall beautiful.
(草山・一戸 2005: 182)
- b. *Mother cooked rice delicious.

(Murao 2009: 192)

そして、このタイプが英語において成立しないという事実は両言語における結果構文の比較・対照を困難にしていると思われる。そこで、本稿では両言語の結果構文における分布上の相違がどこから生じているのかその要因について探究していく。

1. 因果関係 vs. 目的関係

英語と日本語に見られる上述の結果構文の相違は主に「因果関係」と「目的関係」の対立という観点から分析されている。より具体的に言うと、英語の結果構文は動詞の表す事象と結果句の表す事象間の「因果関係」を基盤にして意味拡張するのに対して、日本語の結果構文ではこれらの二つの事象間の「目的関係」を基盤にして意味拡張をするというものである。この線に沿った分析は、まず初めに草山・一戸（2005）で指摘され、その後 Murao（2009）によってより詳細に展開されている。これに対して、本稿ではこれらの特徴づけのみでは両言語の結果構文の相違を十分に捉えきれないことを示していくことにする。そこで、本節では Murao（2009）でなされた分析を概観し、その批判的検討を行うことにする。

1.1. 英語の結果構文

Murao（2009）は、make 使役構文や不変化詞構文との形式及び意味的関連性に注目し、[NP1 V NP2 AP/PP] という形式を持つ英語の結果構文は、その意味を特徴づける中心的認知領域として Causality（因果関係）、Telicity（終結性）、Affectedness（受影性）という概念が喚起されることを指摘している。さらに、Murao（2009）は、これらの概念の中でも Causality が英語の結果構文の拡張に重要な役割を果たすと主張している。この分析において、英語の結果構文は、(7) の Basic Resultative をプロトタイプとして、(8) から (10) への方向に、客観的な Causality を表すタイプから主観的な Causality をより顕在化するタイプへと拡張していくと捉えられている。

- (7) Basic Resultative
a. They broke the window to pieces.

- b. John painted the wall red.
c. She froze the jelly solid.
- (8) Non-Basic Resultative
a. John hammered the metal flat.
b. John kicked Bob black and blue.
c. The gardener watered the tulips flat.
- (9) Intransitive Resultative 1
a. I danced myself tired.
b. The lecturer talked himself hoarse.
c. The girl cried herself to sleep.
- (10) Intransitive Resultative 2
a. The joggers ran the pavement thin.
b. Professor talked us into a stupor.

1.2. 日本語の結果構文

一方で, Murao (2009) は, 日本語の結果構文は, Causality (因果関係) を本来的な意味基盤とする英語の結果構文と異なり, Manner (様態) や Purpose (目的性) という認知領域をより強く喚起すると主張している. この主張は, 日本語の結果構文がそれと同じ形式を持つ (11) のような様態副詞構文から拡張した結果として生じたものという想定に基づいている. Manner (様態) は Purpose (目的性) と概念的に近接しており, Purpose (目的性) は Causality (因果関係) と密接な関係にあるので, これら三種類の概念間における際立ち上の相対的な度合いに応じて, 以下に例示されるような拡張の方向性が日本語の結果構文に見出されるのである.

Manner

- (11) a. 彼は手を速く振った.
b. 太郎は旗を小さく振った.

Purpose-manner

- (12) a. 彼は靴のひもを堅く/緩く結んだ.
b. 彼は肉を厚く/薄く切った.

Purpose Resultative 2

- (13) a. ジョンが壁を美しく塗った.
b. 太郎は花子の髪を可愛く切った.

Purpose Resultative 1

- (14) a. 彼女は靴をピカピカに磨いた.
b. メアリーはテーブルをきれいに拭いた.

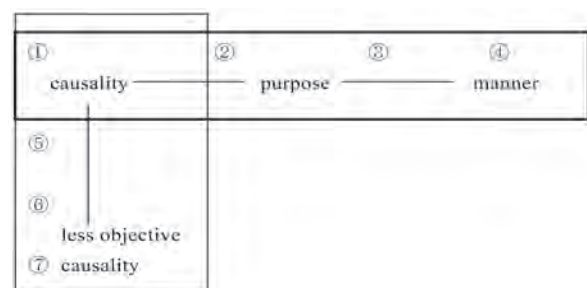
Basic Resultative

- (15) a. ジョンが壁を赤く塗った.
b. 太郎が花瓶を粉々に割った.

例えば, (13) と (14) のタイプは両者とも Purpose Resultative と呼ばれ, Purpose と Causality が喚起されるが, 後者の方が前者よりも Purpose の際立ち度合いが低いが, その分 Causality の際立ちが高くなる. さらに, (15) のタイプでは Causality が最も中心的な認知領域として機能し, Purpose がより周辺的な認知領域となる.

1.3. 英語と日本語の結果構文の比較

Murao (2009:190) は英語と日本語における結果構文の下位タイプ及び関連構文についてのこれらの観察を図1に示される意味地図にまとめている. 意味地図とは, ある文法形式が通言語的に表し得る機能を表示した概念空間上において個別言語の文法形式が表し得る範囲を写像したものである (Croft 2001, Haspelmath 2003). 太字で示された横に伸びた長方形が日本語の結果構文が採用する言語形式がカバーする概念領域を表しており, 英語の結果構文が表し得る概念領域は縦に伸びた長方形によって表されている. このような意味地図を想定することで, 英語と日本語の結果構文の拡張パターンの相違点が明らかとなる.



- ① Basic Resultative ② Purpose Resultative 1
③ Purpose-manner ④ Manner
⑤ Non-basic Transitive Resultative
⑥ Intransitive Resultative 1 ⑦ Intransitive Resultative 2

図1. 英語と日本語の結果構文の意味地図

ここで, もう一度, (3) と (4) の対立について考えてみよう. これらの結果構文は動詞が変化結果を含意せず, 図1の中における⑤と⑥, すなわち Non-basic Transitive Resultative と Intransitive

Resultative 1 に相当している。

- (3) a. John pounded the metal flat.
 b. The lecturer talked himself hoarse.
 (4) a. ?ジョンが金属をペチャンコに叩いた.
 b. *講師は自分の声をカラカラにしゃべった.

Murao (2009) の分析に従うと、この容認性の差は英語の結果構文が Causality を基盤とする一方で、日本語の結果構文にとっては Causality を中心的認知領域とする Basic Resultative が拡張の終点であることに求められる。つまり、日本語の結果構文は、英語の結果構文と異なり Causality を基盤としていないため、Basic Resultative のような動詞自体で Causality が保証されるタイプは表せても、Causality が主観的に読み込まれる必要とされるこれらのタイプにまでは拡張できないと分析されているのである。

さらに、(5) と (6) の対立も両言語を異なる意味基盤の観点から特徴付けることで説明されると主張されている。

- (5) a. ジョンが壁を美しく塗った.
 b. お母さんがご飯をおいしく炊いた.
 (6) a. *John painted the wall beautiful.
 (草山・一戸 2005: 182)
 b. *Mother cooked rice delicious.
 (Murao 2009: 192)

このタイプは、結果句が動詞の表す事象の目的を表すことを意図したものであり、Manner を表す構文を基盤にして Purpose を中心的認知領域とする構文に至る日本語の結果構文の拡張過程に自然な形で位置づけられ、図 1 の意味地図上では、②の Purpose Resultative に対応している。一方で、(6) が容認されないのは、英語の結果構文では Causality を基盤とするため、Causality を表す構文を超えて Purpose を中心的認知領域とする構文にまで拡張不可能であるためということになる。

1.4. Murao (2009) の問題点

Murao (2009) の分析は一見したところ、Causality と Purpose の対立という捉え方によって英語と日本語の結果構文における相違点を適切

に捉えているかのように見える。しかしながら、個々のデータをよく見てみると、これらの概念では、両言語の結果構文の分布を十分に説明できないことが判明する。

第一に、英語の結果構文において、Causality だけではなく Purpose を中心的認知領域とする結果構文、すなわち結果句が動詞の表す事象の目的を表すタイプが存在する。

- (16) a. 彼女はテーブルをきれいに拭いた.
 b. She wiped the table clean.
 (Washio 1997: 16)

Murao (2009) は (16a) の事例を Purpose Resultative 1 と呼び、日本語の結果構文において結果句が動作の目的を表す例として引き合いに出しているが、対応する英語の結果構文も成立する。(16a) における動詞「拭く」と同様、(16b) における wipe も必ずしも変化結果を含意せず、また Washio (1997) が Logman dictionary の記述から確かめているように、本来、何かを取り除く目的を持った活動を表している。

- (17) **wipe**: to rub (a surface or object), e. g., with a cloth or against another surface, in order to remove dirt, liquid, etc.
 (from Longman dictionary, Washio 1997: 14)

従って、図 1 上では表示されていないが、Purpose Resultative 1 が英語の結果構文の意味地図がカバーする領域に含まれてはいけないという理由は特別無いように思われる。

さらに、英語の結果構文の中には Causality よりむしろ Purpose が喚起されることが要求されるものもある。

- (18) a. John hammered the metal {flat/*safe}.
 b. The slide at the park had come loose.
 Several children had hurt themselves on the protruding edge. In order to prevent further injuries, John hammered the metal safe. (Verspoor 1997:128, 129)

(18a) における結果句の分布が示唆しているように、ハンマーで金属を打つという行為と自然な因果関係を構成するのは、普通、金属が「平らに

なる」という結果状態であり、「安全になる」という結果状態ではない。しかし、(18b)のように、safe という結果句は、それがハンマーで金属を打つ行為の目的を表すものとして解釈できるような文脈では結果構文に生起可能である。同様のことが以下の事例についても言える。

(19) a. The wise dog barked his master awake to warn him of the fire.

b. *A stray dog in the distance barked the sleeping child awake.

(影山 2007:39)

影山 (2007) によると、同じ動詞でかつ同じ結果句であっても意図的な目的を表すタイプの方が偶発的な出来事を表すタイプよりも結果構文としての容認度が高いと判断されるという。ここで、(19) の結果構文は、動詞と結果句の間における客観的な因果関係の希薄化の程度が最も高く、Intransitive Resultative 2 に相当していることに注目する必要があるだろう。Murao (2009) の分析では英語の結果構文が Intransitive Resultative 2 に拡張する過程において因果関係が保持されとしか指定されていないので、(19b) が容認されないことは予測困難であるし、(19a) のように、それと同じ動詞と結果句の連なりが Purpose を喚起する解釈を持つ際に容認されるようになるという事実も決して扱うことはできないであろう。Murao (2009) のように、英語の結果構文に対して、Causality を表す構文を超えて Purpose を中心的認知領域とする構文にまで拡張不可であると想定してしまうと、(19a) が容認不可能である一方、(19b) が容認可能であるという誤った容認性判断を下してしまうことになるだろう。

第二に、動詞の意味に含意されないような結果を表す拡張的な日本語の結果構文の中には、結果句が動作の目的を表さないタイプも存在する (浅井 2012)。

(20) a. ジョンがうっかり壁を汚く塗った。

b. 弟は買ったばかりの新車を趣味悪く改造した。

(21) a. お母さんがうっかりご飯をまずく炊いた。

b. あのテレビプロデューサーは番組をつまらなく作った。

(20) では状態変化動詞が現れているが、それが内在的に表す結果状態を結果句が叙述していないことは明らかである。(21) においても結果句と内在的な因果関係を構成しない生産動詞が現れている。Murao (2009) の分析に従えば、このようなタイプでは動詞と結果句が手段-目的の関係にあるはずであるが、(20) と (21) の結果句は、そもそもそれ自体の意味内容から示唆されているように、普通、ある行為から意図される状態ではなく偶発的に生じた状態を表すものである。確かに日本の結果構文は、結果句が動作の目的や様態を喚起することによって、拡張的事例が認可される場合が多く、(22) と (23) で例証されているように、そもそも結果自体を含意しない行為動詞であっても結果構文を形成することが可能である。

(22) a. [?]太郎が金属を平らに／ペチャンコに叩いた。

b. 鳥もも肉は観音開きに切り、平らに叩いて下さい。

(草山・一戸 2005: 176, 177)

(23) a. *太郎は次郎をアザだらけに蹴った。

b. 太郎は車をボコボコに蹴った。(ibid.)

しかしながら、結果自体を含意しない行為動詞に関しても、結果構文を形成するために、動詞と結果句の間に手段-目的関係が必ずしも要求されないことがあり、それは以下から確かめられる。

(23) a. ある人が会社のトイレをうっかり汚く使った。

b. 上田さんは本人も気づかぬうちに面白はずのことをつまらなく話した。

以上のことから、Murao (2009) の特徴づけに反して、1) 英語の結果構文は Purpose を基盤に拡張し得ることと 2) 日本語の結果構文には Purpose を基盤にしない拡張事例が存在することが分かる。次節では、これらの事実をどのように捉えるべきか考察していく。

2. サテライト枠付け言語 vs. 動詞枠付け言語

まず、1) の英語の結果構文に関する事実を捉えるためには、複合事象において主要事象として機能する枠付けイベント (framing event) の中核要素がコード化される様式に対して提案された Talmy (2000) の言語類型の視点を取り入れることが有用であると思われる。枠付けイベントには移動事象や状態変化事象が含まれ、それぞれの中核要素は移動経路や状態変化の推移過程である。Talmy (2000) はこれらの中核要素がサテライトと呼ばれる動詞の付随要素と主動詞のいずれによってコード化されるかどうかによって世界の言語をサテライト枠付け言語 (Satellite-framed language) と動詞枠付け言語 (Verb-framed language) の二種類に区分している。英語は、(24) に示されているように、枠付けイベント内の中核要素である移動経路を前置詞句などのサテライトで表現し、前者の言語タイプに分類される。

- (24) a. The bottle floated into the cave.
b. The bone pulled out of its socket.

(Talmy 2000:227)

また、サテライト枠付け言語では、枠付けイベントと補助関係を持つ共イベント (co-event) は主動詞で表現され、(24a) と (24b) では、移動事象に対してそれぞれ「様態」と「原因」の関係を持っている。これと関連して、松本 (1997, 2002) は、移動の「経路」を表す動詞は、(25) のように、使役移動構文を形成することが一般に不可能である一方で、移動の「様態」や「手段」を表す動詞はそれぞれ (26) と (27), (28) に示されているようにそれが可能であることを指摘している。

- (25) a. *John entered the man into the barn.
b. *John escaped the man out of the cell.

(松本 2002: 200)

- (26) a. The horseman ran the horse into the barn.
b. The horseman swam the horse to the shore. (松本 2002:200)

- (27) Sam {kicked/pushed/pulled/shoved/tugged/

dragged/threw/tossed/hurled/pitched/squeezed} it into the hole.

(松本 2002:192)

- (28) a. John {forced/let/allowed} the man into the barn.
b. John {forced/let/allowed} the man out of the cell. (松本 2002:201)

枠付けイベントと「様態」と「手段」の関係を持つ共イベントが主動詞で表現されるサテライト枠付け言語のこのようなコード化パターンは、枠付けイベントが状態変化事象である結果構文においても観察される。

- (29) a. I swung/slammed the door shut.
b. He jerked/started awake.

(Talmy 2000: 239)

- (30) a. I kicked the door shut.

(Talmy 2000: 239)

- b. I shook him awake. (ibid.)

- c. I washed the shirt clean.

(Talmy 2000: 265)

(29) は、状態変化事象と「様態」の関係を持つ共イベントが主動詞で表現されている。(30a, b) に関して Talmy (2000) は主動詞で表現された共イベントは状態変化事象と「原因」の関係を持つと述べているが、これは「手段」と特徴づけても差し支えない関係であると言える。また、(30c) の wash は Talmy (2000) が達成含意動詞 (implied-fulfillment verb) と呼ぶものであり、その意味成分として含まれる「意図された結果」が実現することをサテライトの付加によって確認する動詞である。結果として、この動詞も状態変化事象に対して「手段」の関係を持つと言える。これらのことを考慮すると、Murao (2009) の分析に疑問を投げかける以下の事例の存在も自然な形で説明可能となる。

- (31) a. She wiped the table clean. (= (16b))

- b. John hammered the metal safe.

(cf. (18b))

- c. The wise dog barked his master awake to warn him of the fire. (= (19a))

すなわち、サテライト枠付け言語である英語が

複合事象を表す際、移動事象や状態変化事象などの枠付けイベントに対し主動詞が「手段」を指定する場合があるのだから、(31)のように結果句が動詞の表す事象の目的を表す結果構文が成立するのは当然なのである。

さらに、サテライト枠付け言語と動詞枠付け言語の区分は英語と日本語の結果構文の相違を捉える際に一つのヒントを提供してくれる。

- (32) a. I kicked the ball **into the box**.
(Talmy 2000: 228, 強調は筆者)
b. They floated the raft **down the river**.

(松本 1997:158, 強調は筆者)

すでに述べたように、英語のようなサテライト枠付け言語では、移動経路を動詞の付随要素であるサテライト(太字で表示)で表現される。一方で、日本語は動詞枠付け言語(Verb-framed language)に該当し、(32)に対応する文に翻訳しようとする、(33)のように移動経路を主動詞(太字で表示)で表現する必要があり、「様態」と「原因」を指定する共イベントは従属節内における動詞の分詞形で表現されなければならない((33b)は松本(1997: 158)による翻訳)。

- (33) a. 私はボールを蹴って箱に**入れた**.
b. 彼らはそのいかだを浮かべて川を**下らせた**.
(34) a. [?]私はボールを箱に蹴った.
b. *彼らはそのいかだを川の下に浮かべた。(32b)の意味で)

このことはつまり、日本語では、(34)に示されるように、枠付けイベントと「様態」や「原因」の関係を持つ共イベントを英語のように主動詞で表現することができないということを意味している。そうすると、(3)の英語の結果構文(ここではサテライトを太字で表示)に対応する(4)の各文が容認されないのは、(34)の場合と平行的に日本語が動詞枠付け言語であるという事実に基づき帰着させることが可能である(cf. 小野 2012)。

- (3) a. John pounded the metal **flat**.
b. The lecturer talked himself **hoarse**.
(4) a. [?]ジョンが金属をペチャンコに叩いた.
b. *講師は自分の声をカラカラにしゃ

べった.

- (35) a. ジョンが金属を叩き**延ばした**.
b. 講師はしゃべって声を**囁らした**.

すなわち、動詞枠付け言語において主動詞で表されるべきなのは(35)のように枠付けイベントである状態変化事象であって、(4)のようにそれと「様態」や「原因」の関係を持つ共イベントではないのである。

3. 下位事象間の意味的統合

前節において、Talmy (2000) によって提示された複合事象のコード化に関する言語類型の視点を取り入れることで、英語の結果構文が結果句の目的解釈を示すことや、日本語の結果構文と異なり、変化結果を含意しない行為動詞を伴う結果構文を形成可能であることが説明されるのを見た。しかしながら、考察するべき事実がまだ残されており、それらは単に英語と日本語がそれぞれサテライト枠付け言語と動詞枠付け言語であるという特徴付けだけでは説明不可能である。

まず、これまでの観察ですでに明白なように、動詞枠付け言語として見なされる日本語であっても多くの結果構文が成立する。

- (36) a. ジョンが壁を赤く塗った。(=(2a))
b. メアリーはテーブルをきれいに拭いた。(=(14b))

しかしながら、Croft et. al (2010) が指摘するように、Talmy (2000) による枠付け様式の分類は各言語間の全体的な相違に対応するものではなく、ある言語内に見られる個々の事象タイプの相違に適用するものであるという。例えば、これはTalmy 自身も指摘している事実であるが、状態変化に関わる複合事象は、英語においてサテライト枠付パターンと動詞枠付パターンの両方のコード化様式が観察される。

- (37) a. I wiped the table **clean**.
b. I **cleaned** the table (by wiping it).
(38) a. She hammered the metal **flat**.
b. She **flattened** the metal (by hammering it). (Croft et. al 2010: 212)

従って、日本語において、状態変化事象が一方では(35)のように動詞枠付けパターンで表現され、また他方において(36)のようにサテライト枠付けパターンで表現されることも十分に想定可能なことなのである。するとここで問うべき問題は、日本語がサテライト枠付けパターン、すなわち結果構文を許すのはどのような場合なのかということである。Croft et. al (2010) はブルガリア語、日本語、アイスランド語、オランダ語、英語の対照研究を通して、位置変化や状態変化の複合事象のコード化パターンを以下のようにまとめている。

(39) **double framing satellite framing** < verb framing, compounding < coordination
(Croft et. al 2010: 220)

(40) 'paint X red' < 'freeze solid' < 'shoot X dead'?
< 'wipe table clean'? < 'push door open' < 'pound dough flat' < 'hammer metal flat'?
< 'rock X to sleep'
(Croft et. al 2010: 223)

(39) のスケールは複合事象における下位事象間の形態・統語上の統合度合いを示しており、左から右に行くにつれてその程度が相対的に低くなる。(40) のスケールは状態変化事象における原因事象と結果事象の意味上の統合度合いを示し、左から右に行くにつれてその程度が相対的に低くなる(「?」付きの状況タイプは言語間で位置づけが異なることを表している)。Croft et. al (2010) の観察によると、(40) においてより高い意味的統合を示す状況タイプほど(39) のスケール上で上位に位置づけられた形態・統語的戦略によってコード化される傾向があるという。このことから、日本語においても、ある状態変化事象がサテライト枠付けパターンでコード化されることは、その原因事象と結果事象の意味的統合性が高いことを意味すると言いうことができる。実際のところ、日本語でサテライト枠付けパターンを採用した結果構文が成立するのは、(36) のように、原因事象を表す動詞が結果事象で表される変化結果状態をすでに含意しているか、あるいはそれを潜在的に方向づけている場合のみであると主張さ

れてきた(cf. Washio 1997)。また反対に、(4) のような日本語の結果構文が成立しないのは、それらが表そうとしている状況がサテライト枠付けパターンを可能にするほど下位事象間の意味的統合性が高くないからである。このことは(4)に見られる動詞は変化結果を含意せず、結果事象が原因事象から予測可能ではないという点において明らかである。

このように、サテライト枠付けパターンによるコード化を下位事象間の意味的統合性という観点で捉えることによって、以下のような結果句が動詞の意味に必ずしも含意されないような結果状態を表す日本語の結果構文の存在も説明可能となる。

- (5) a. ジョンが壁を美しく塗った。
b. お母さんがご飯をおいしく炊いた。

まず(5) のような事例であるが、これらは結果句が動詞の表す事象の目的を表すタイプであり、その点において原因事象と結果事象の統合性を示すと言える。すでに見たように、Murao (2009) はこの事実を基に日本語の結果構文は Purpose という概念を基盤に拡張すると主張しているのであるが、そのような捉え方のみでは(41) のような事例の存在を扱うことができない。というのも、これらの事例では結果句が動詞の表す事象の目的と理解されない解釈が可能だからである。

- (41) a. ジョンがうっかり壁を汚く塗った。
(= (20a))
b. ある人が会社のトイレをうっかり汚く使った。(= (23a))

ここでもまた、下位事象間の意味的統合性の観点によって、このようなタイプの結果構文が成立することが説明可能である。(41) における結果句「汚く」が表す状態は望ましくない状態であるので、それは動詞の意味からは普通予測されるものであるとは言えない。しかしながら、ここでの「汚く」が表す意味内容におおよそ「不快なモノの付着」という概念が含まれているのを認識することで、原因事象と結果事象の意味的統合性が保証されていることが確認される。壁を塗るとい

う行為やトイレを使用するという行為にはそれぞれ色素や汚物の付着が伴うので、これらの事象が「不快なモノの付着」の内容を具体的に述べていると見なすことが可能なのである。同じようなことが(42)の事例についても言える。

(42) a. ルームメイトがうっかり台所を汚く使った。

b. 息子が焼き魚をうっかり汚く食べた。

(42)においても、結果句が動詞の意味から予測可能であるとは言い難い結果状態を表している。しかし、ここでの結果句「汚く」はあるモノが散らかった状態を表しており、そのような結果事象は「モノの拡散的移動」という原因事象を前提としていることは注目する価値があるだろう。動詞(句)の表す状況は「モノの拡散的移動」という事象として捉えられるので、結果事象の側に視点を置くと、(42)においてもやはり原因事象と結果事象間に意味的統合性と形容できるような密接な相互関係が浮き彫りとなるのである。

4. Subjective Evaluation

また、(41)や(42)のような事例から日本語の結果構文の拡張の基盤となる概念がPurpose以外にも存在していることが示唆される。本稿ではそれがSubjective Evaluation(主観的評価)であると考え。そもそも、この概念は(5)のような結果構文においても含意されていると言える。(5)における結果句は動詞の表す目的として解釈することは可能であるが、それ自体はSubjective Evaluationを表す語句に他ならないからである。これとの関連で、(5)に対応する英語の結果構文が成立しないことを思い起こされたい。

(6) a. *John painted the wall beautiful.

b. *Mother cooked rice delicious.

すでに述べたように、Murao(2009)は(6)が容認されないのは英語がPurposeを基盤にして拡張しないためであると主張していた。しかしながら、1.4.節で観察したように、結果句が動詞の表す事象の目的を表す英語の結果構文が存在することを考慮すると、(6)の非容認性は単に英語の

結果構文はSubjective Evaluationが関わる結果状態を表せないと述べることで捉えられるのである。

Subjective Evaluationという概念の存在は(41)や(42)のように動作の目的として解釈されない望ましくない結果状態を表す結果構文においてより明白であり、そのようなタイプの中に日本語の結果構文のさらなる拡張事例が見出され得る。

(43) a. 弟は買ったばかりの新車を趣味悪く改造した。(=(20b))

b. 上田さんは本人も気づかぬうちに面白いはずのことをつまらなく話した。

(=(23b))

(21) a. お母さんがうっかりご飯をまずく炊いた。

b. あのテレビプロデューサーは番組をつまらなく作った。

(41)や(42)の結果構文では動詞の表す事象が結果句「汚く」の意味の中に内在する事象の下位タイプを指定するという点において、原因事象と結果事象の意味的統合性が認められた。

これらの事例では動詞と結果句の間にそのような関係が認められないが、それにも関わらず結果構文として成立している。このことは用法基盤モデルの観点(Langacker 1987, 1991, 1999, Taylor 2002)に立ち、スキーマ抽出によるカテゴリーの拡張プロセスを図2に示される様式で想定することによって説明可能となる。そこではスキーマ化と拡張はそれぞれ上向きの実線矢印と破線矢印で示されている。

まず、(43a)のような事例は(41a)のような「汚い」結果構文の拡張事例であると見なせるが、それは両者とも因果関係と否定的な結果状態という共通点を持っているからである。一方で、(21a)のような事例は生産動詞を伴っているので、因果関係という概念はがかなり希薄と言えるが、ここでも否定的な結果状態という共通点に注目し、より抽象的な上位スキーマ(図中の最上部)を抽出することで、それらを結果構文の拡張事例として扱うことができる。これらのことから、従来指摘されてきたCausalityやPurposeという概念だけでは全ての日本語の結果構文を扱えな

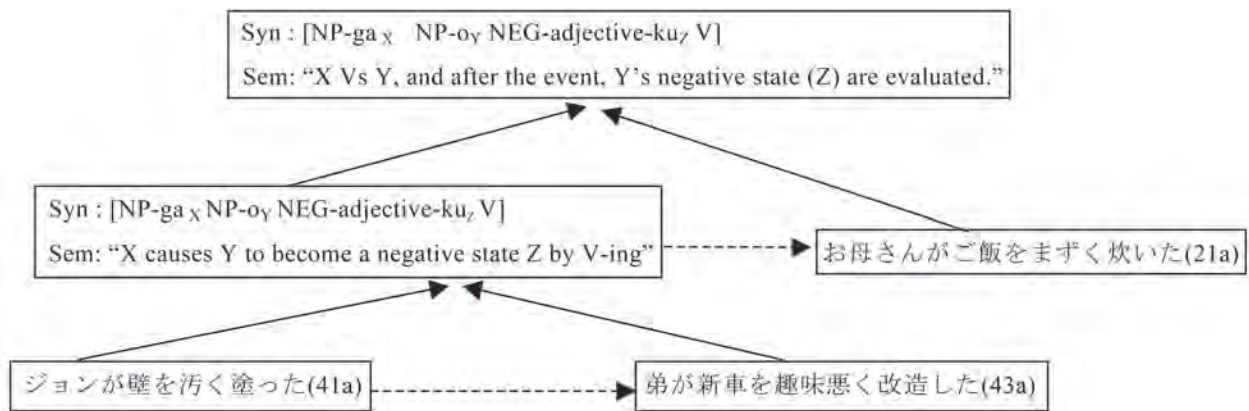


図2. 望ましくない結果を表す結果構文のネットワーク

いことが分かる。日本語の結果構文はこれらの概念が関わらず、行為の結果状態に対して単に評価を加えるという状況のみを表すタイプにまで拡張することが可能なのである。

5. 結語

従来の研究では、英語の結果構文と日本語の結果構文の相違はそれぞれ Causality と Purpose という概念で特徴付けられてきた。しかし、これまでに指摘されてきたデータやこれまでに観察されてこなかったデータを詳細に検討すると、Purpose を基盤とする英語の結果構文が存在し、Purpose を基盤とし得ない日本語の結果構文が存在することが判明する。従って、Purpose という概念を両言語の結果構文を区別するのにあまり適切なパラメーターとして機能していないと言える。そこで、本稿では、Purpose という概念の役割は認めつつも、Subjective Evaluation という概念のみで扱える日本語の結果構文を指摘し、両言語の結果構文は Causality とこの Subjective Evaluation の対立という観点からの方がより適切に捉えられることを示唆した。

参考文献

浅井良策 (2012) 「日本語の「汚い」結果構文について」『EX ORIENTE』(19), 85-111.

- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版。
 影山太郎 (2001) 「結果構文」『日英対照動詞の意味と構文』影山太郎 (編) 大修館 154-181。
 影山太郎 (2007) 「英語結果述語の意味分類と統語構造」小野尚之 (編) ひつじ書房 33-65。
 草山学・一戸克夫 (2005) 「日本語と英語の結果構文再考; Cause-Effect か行為の目的か」『日本認知言語学会論文集』5, 175-185。
 高見健一・久野暲 (2003) 『日英語の自動詞構文』研究社。
 松本曜 (2002) 「使役移動構文における意味的制約」『認知言語学 I: 事象構造』西村義樹 (編) 187-211 東京大学出版会。
 Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*, Oxford University Press, Oxford.
 Croft, William, Jóhanna Barðdal, Willem Hollmann, Violeta Sotirova, and Chiaki Taoka (2010) "Revising Talmy's Typological Classification of Complex Events", *Contrastive Construction Grammar*, ed. by Boas Hans, 201-235, John Benjamins, Amsterdam.
 Haspelmath, Martin (2003) "The Geometry of Grammatical Meanings: Semantic Maps and Cross Linguistic Comparison," *The New Psychology of Language*, Vol. II, ed. by Michael Tomasello, 211-242, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, New Jersey.
 Langacker, Ronald (1987) *Foundations of Cognitive*

- Grammar*, Vol. I: *Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. II: *Descriptive Applications*, Stanford University Press, Stanford.
- Murao, Haruhiko (2009) *Cognitive Domains and Prototypes in Constructions*, Kuroshio Publishers, Tokyo.
- Talmy, Leonald (2000) *Toward a Cognitive Semantics*, Vol. II: *Typology and Process in Concept Structuring*, MIT press, Cambridge, MA.
- Taylor, John (2002) *Cognitive Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- Verspoor, Cornelia (1997) *Contextually-Dependent Lexical Semantics*, Ph. D. dissertation, University of Edinburgh.
- Washio, Ryuichi (1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1–49.

